

「世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなって  
います」(21節)。パウロは、人間の知恵と神の知恵を分けて考えています。人間の  
知恵は、それによって神を知ることができないのだから、限りあるもの、絶対ではな  
いものだと捉えています。一方、神の知恵とは、「十字架につけられたキリスト」  
(23節)であるとしながら、それは当時のユダヤ人やギリシャ人の知恵から見れば、  
期待外れの弱き指導者、時の権威に逆らった愚かな犯罪人でしかないと捉えていま  
す。しかしその一方で、人間の知恵に乏しく、世から見れば無学で、無力で、見下げ  
られていたコリントの信徒たちにとっては、「十字架につけられたキリスト」が救い  
の力になっている事実をも示します。この人知を超えた神の業を、パウロは「神の愚  
かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」(25節)と表現しています。

パウロは、決して人間の知恵を否定したのではありません。コリントの教会の人々  
は、教会や相手のために思い、知恵を出し合っていたのです。しかし、いつしか、そ  
の知恵が神のごとくになり、それを受け入れぬ者との間に歪みが生じ、教会の中に党  
派争いが起こっていること(1:11～17)を暗に指摘しています。

昨年(2015年)の11月13日、パリで起こったテロによって、愛する妻を失ったアントワー  
ヌ・レリスさんが、『憎しみという贈り物はあげない』というメッセージを発表し、  
世界中で大きな反響を呼びました。「君たちは、神の名において無差別な殺戮をし  
た。もし神が自らの姿に似せて我々人間をつくったのだとしたら、妻の体に撃ち込ま  
れた銃弾の一つ一つは神の心の傷となっているだろう。だから、決して君たちに憎し  
みという贈り物はしない。君らはそれを望んでいるのだろうけれど、憎悪に怒りを返  
すことは、君らを作り上げたのと同じ無知に屈服することに等しい。私と息子は2人  
になった。でも世界中の軍隊よりも強い」。レリスさんは、神の名を帯びた人間の知  
恵や正義に、限りを見ておられます。そして、「剣を取るものは皆、剣で滅びる」  
(マタイ 26:52)、この神の知恵にこそ、本当の賢さがあり、強さがあり、勝利があ  
ることを信じ、祈りの中で憎しみの感情を必死に抑えながら、神の知恵を選び取ろ  
うとしたのでした。

パウロはこう語っているのではないのでしょうか。「世は自分の知恵で神を知ること  
ができませんでした。この、人間の知恵が限られたものであるという事実は、神の知  
恵にかなっていません。それは誰一人、神の前で誇ることがないようにするためです。  
誇るものは主を誇れ」。

(文責：望月達朗牧師)

